



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ストリゴーリニキの「書物」をめぐる最近の論争：『偽の教師についての講和』を中心に
Author(s)	宮野, 裕
Citation	西洋史論集, 1, 1-14
Issue Date	1998-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37417
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_1-14.pdf



ストリゴリニキの「書物」をめぐる最近の論争

——『偽の教師についての講話』を中心に——

宮 野 裕

はじめに

一四世紀末のロシア西北部、ノヴゴロドとプスコフに現れた「異端」ストリゴリニキの研究は長い歴史を持っている。^①定説的見解によれば、この「異端」は聖職者の腐敗を批判し、彼らに代えて教区民から教師 *учитель* を選んでいた。また聖体を否定し、聖職者ではなく大地に向かって懺悔を行った。それゆえ正統教会から弾圧を被り、一五世紀二〇年代に根絶されたのであった。

ところで一三八六年にこの「異端」を論駁したベルミ主教によれば、「異端」の指導者であったノヴゴロドの輔祭カルプは「自分の異端の助けになるように書き写した書物 *писаные книжы*, *ске и списа на помощь ереси своей*」を持っていて、これに基づいて自分たちで教区民に対し説教を行っていた。^②当然、この「書物」はいかなるものであったのか、という疑問が生じる。後に述べるように、幾人かの研究者は「異端」の主張を検証し、この主張と同時代に存在

した堕落聖職者に対する批判文書集（以下「批判文書集」と略）のそれとの類似を指摘した。こうした研究者によれば、この「批判文書集」こそが「異端の書物」であった。

「書物」の内容の解明は、もちろん「異端」研究の核である教義の解明に直結するばかりでなく、中世ロシアに存在した堕落した聖職者に対する批判とストリゴリニキの「異端的思想」との関係を明らかにする可能性を秘めている。本稿ではこの「異端の書物」に関する最近の論争を紹介し、諸研究者の意見を検討してみたい。筆者の本来の関心は「異端」そのものにある。だが、その検討の前にこの「書物」の問題が別個に考察されるべきであろう。なぜなら第一にこの「書物」の問題が「異端」研究のなかで一定の自立した位置を占め、これに関する先行研究が十分に存在しているからであり、第二に、「異端」教義の解明にこの「批判文書集」が利用される場合があるのだが、その際に回答を要すべき問題点が存在するからである。

註

(1) メンリコーリニキ「異端」については、差し当たって以下の研究がある。

- Руднев Н. Рассуждение о ересях и расколах, бывших в русской церкви со времени Владимира Великого до Иоанна Грозного. М., 1838. С. 68-88; Костомаров Н. И. Северно-русские народо-правства во времена удельно-вещного уклада. СПб., 1863. С. 461-466; Никитский А. И. Очерк внутренней истории Пскова. СПб., 1873. С. 187-237; Голубинский Е. Е. История русской церкви. т. 2. ч. 1. М., 1900. С. 396-413; Будовниц И. У. Русская публицистика XVI века. М.-Л., 1947. С. 43-48; Казакова Н. А. и Лурье Я. С. Антифеодальные еретические движения на Руси XIV-начала XVI века. М., 1955. С. 7-73; Черепнин Л. В. Из истории еретических движений на Руси в XIV-XV вв. Вопросы истории религии и атеизма. т. 7. М., 1959. С. 257-275; Клибанов А. И. Реформационные движения в России в XV-первой половине XVI в. в. М., 1960. С. 118-136, 167-173; Хорошев А. С. Церковь в социально-политической системе новгородской феодальной республики. М., 1980. С. 67-77; Рыбаков Б. А. Стригольники. М., 1993; Fedotov G. P. The russian religious mind. vol. 2. Massachussets. 1975. pp. 113-148; Hösch E. Orthodoxie und Häresie im alten Russland. Wiesbaden, 1975. S. 63-67. ルイバコーフの異端論については筆者は以前紹介したことがある。書評「ルイバコーフ著『メンリコーリニキ』」『北大史学』三六号、一九九六年、五五—六五ページ。
- (2) Русская историческая библиотека (РИБ). т. 6. СПб., 1908. С. 214; Казакова и Лурье. Антифеодальные... С. 238.

一 研究史概観

「異端の書物」についての最初の実研究者はセシェーリニコフである⁽¹⁾。

彼は文書集『イズマラグド Измаград』⁽²⁾を、一四世紀末のノヴゴロド地方で作成されたルミヤンツェフ・コレクション一八六番写本（以下ルミヤンツェフ写本と略）を使用して検討した⁽³⁾。『イズマラグド』には二つのグループがあり、一方は一四—一六世紀の写本（旧版）で、他方は一五世紀以降の写本（新版）で残っていた。ルミヤンツェフ写本の『イズマラグド』は前者に属していた。彼は『イズマラグド』旧版と新版の内容を比較し、旧版の幾つかの文書が新版では削除されていることに注目した。削除された文書は、①読書を推奨するもの、②聖職者に対する批判、③教区民に説教の権利を与える必要を説くものであった。実はこのルミヤンツェフ写本自体はその前半部と最後部が欠けていて『イズマラグド』新版との比較検討に耐えられるものではない。だが南西ルーシで一六世紀に作成されたトロイツェ・セルギエフ・コレクション二〇四番写本（以下トロイツェ・セルギエフ写本と略）では『イズマラグド』旧版の内容全体が残されていた。従って彼は①「異端」と同時代のルミヤンツェフ写本は一六世紀のトロイツェ・セルギエフ写本と同じ『イズマラグド』旧版を含んでいたことを前提とし、②『イズマラグド』旧版が入っていたはずであるルミヤンツェフ写本は教会当局の手で「被害を被り」、教会にとって危険な文書が削除されたと考えた⁽⁴⁾。削除された文書の中には、財産を蓄え、無学で齋戒を行わない「偽の」聖職者を排除し、代わりに教育を受けた「良き」教区民が司牧活動を行う必要性を説く『偽の教師についての講話』⁽⁵⁾（以下「講話」と略）が含まれていた。教会当局にとって危険きわまりない『イズマラグド』旧版は、彼によれば「異端」のイデオロギー

を体现していた。なぜなら「異端」を論駁したベルミ主教は、彼らが読書を勧めていたこと、また聖職者を批判するとともに民衆から説教者を「任命」したこと、説教の権利を自分たちのものにしようとしたことを指摘しているからであった。

また彼は同時に、一四世紀八〇年代にブスコフで作成されたノヴゴロド・ソフィア・コレクシヨン一二六二番写本（以下ソフィア写本と略）や、またその大部分を占める文書集『ウラスフィミヤ Власовъ Мѣстныя』に注目した。『ウラスフィミヤ』に含まれる諸文書の内容は『イズマラグド』旧版のそれと同様、読書の推奨、墮落した聖職者への批判であり、やはり『講話』が含まれていた。

ここで『講話』について補足しておこう。これは、前述の『イズマラグド』の中では、単独で第七章を構成していたが、『ウラスフィミヤ』では、別の二つの文書とともに最終章である第六章に配されている。この章には『聖アントニヌスの遺訓』、『講話』、『清き懺悔の緒言』がこの順序で含まれている。

話を戻そう。セジェーリニコフは『ウラスフィミヤ』が一四世紀末のブスコフに浸透したイデオロギーを表現していると述べるに至った。彼は『ウラスフィミヤ』が「異端の書物」であるとは断言しなかったものの、「異端」の要素がこの中には豊富に表現されているとし、その中の幾つかの章は「異端」の教義を見る史料として適切であるとした。⁽⁶⁾

『イズマラグド』旧版に関してセジェーリニコフの見解をさらに押し進めたのがポポーフである。⁽⁷⁾ 彼はセジェーリニコフ同様、ルミヤン

ツェフ写本とトロイツェ・セルギエフ写本の双方に同じ『イズマラグド』旧版が含まれていたと考え、両者に共通するはずの『イズマラグド』旧版の内容を検討した。彼によれば、『イズマラグド』旧版はノヴゴロドの聖ソフィア教会の聖職者の手で編纂されたものであった。

なぜなら第一に『イズマラグド』旧版では「至福なるニフォントの規則」を読むことが勧められているからであった。このニフォントとは、ポポーフによれば、ノヴゴロド大主教ニフォント「在位一一三〇—一五六」のことであった。また第二に「聖ソフィア教会」が登場し、それが絶対的権威をもっているからであった。しかし聖職者に対する敵しい批判文書がなぜ『イズマラグド』旧版のなかに含まれていたのだらうか。この理由は、ポポーフによれば、『イズマラグド』旧版が作成された環境のなかにあった。すなわち『イズマラグド』旧版は聖職者の中でも、同僚の腐敗に対し戦う姿勢をとったグループ内で作成されたのである。このグループこそが輔祭カルプを指導者としたストリゴリーニキであった。

このようにポポーフは『イズマラグド』旧版と「異端」をはじめて直接結びつけ、『イズマラグド』旧版内の「ストリゴリーニキ的要素」を見つけることに終始する。そればかりか彼は『イズマラグド』旧版と類似した内容、形式、起源を持つ文書集『金の鎖 Златая Цепь』を検討し、これも「異端」が作成したものであるとした。彼は、この文書のなかにピョートルという名前が度々登場することに注目し、「異端」がベトルス・ヴァルドーを指導者としたヴァルドー派の流れを汲むという途方もない結論を導き出した。後の研究者は『金の鎖』

に関する彼の論考を、その突飛さゆえにまともに扱うことはなかった。

『イズマラグド』旧版が墮落した聖職者を批判していることは明らかだが、その主張の中心であると考えられている『講話』が、「異端」と同時代のルミヤンツェフ写本に入っていたという証拠はない。それゆえ後の研究者がこの写本に触れることは殆どなかった。フェドートフは『イズマラグド』と「異端」との関係をはのめかしたが、これも何ら論拠があるわけではない。⁽⁸⁾ また『ウラスフィミヤ』についてのセジェーリニコフの論考も疑問視された。この「批判文書集」の内容と「異端の書物」を結びつける直接の証拠がないからであった。

例えばカザコーヴァは「ボボーフによって異端に固有のものである」とされた観念は、正教会の教義と矛盾するものではないし、信仰者や聖職者の道徳観の向上や正教会の権威の強化を目的として、教会人によっても宣伝され得たものである⁽⁹⁾と考えた。すなわち『イズマラグド』旧版や『ウラスフィミヤ』に含まれる読書の勧め、墮落した聖職者に対する批判は、正教会の側から出てもおかしくない主張であり、従ってこれらの主張を根拠として「批判文書集」を「異端の書物」とすることはできない、というのである。ただし彼女は、墮落した聖職者を本を読む教区民と交代させるという主張を見落として、こうした意見を述べてしまっている。それゆえこの批判は十分な説得力を持たない。

「批判文書集」と「異端の書物」との直接の関係の否定を、ソフィア写本の内容全体の系譜をたどることで決定的なものにしたのがクリバーノフである。⁽¹⁰⁾ 彼はセジェーリニコフが扱ったソフィア写本内の

『ウラスフィミヤ』古編纂本（一二七四—一三一二年の間に作成）のテキストと、以前ソコロフによって取り上げられたことのある『ウラスフィミヤ』新編纂本（イヴァン・カリタ「モスクワ大公、在位一三二五—四一」時代に作成）のテキストを綿密に比較し、前者に存在し後者で削られた諸章の検討を行った。その結果、彼はソフィア写本に挿入された『ウラスフィミヤ』古編纂本は、聖職者や修道制、教会に対する批判が一層激しいものであったことを明らかにした。そればかりか彼は、ソフィア写本の内容全体が既に一四世紀初頭には成立していたと考えた。ソフィア写本の諸文書の中で『ウラスフィミヤ』古編纂本の主張とそれ以外の諸文書のそれとは密接な関係にあり、しかも古編纂本の成立時代、つまり一二七四—一三一二年の間にはソフィア写本の全文書が存在し得たからである。また彼は『講話』こそが一四世紀初頭成立のソフィア写本のオリジナルの編者の主張の中心であり、編者の主張は『講話』に集約されていると考え、ついには編者と『講話』の著者は同一人物であると主張するに至った。この主張は現在もお説的見解となつてゐる。そのため彼以後の研究者は『講話』に注目せざるを得なくなった。一方で我々の関心の的である「異端」と『ウラスフィミヤ』や『講話』との関係について、彼は「不幸にも我々はストリゴリーニキの文学遺産を持っていない。このことは我々がこの運動の文化的な意味をしるべく評価する機会を奪い取っている」と述べるにとどまつた。⁽¹¹⁾ だが彼の主張を考慮すれば、彼が『講話』と「異端」との関係を否定的に見ていることは明らかである。『講話』も含めたこれらの文書集は一四世紀前半の「改革運動」の理念を反映

しているものであり、従って早く見積もっても一四世紀中頃に出現した「異端」の「教典」であるはずがなかったのである。⁽¹³⁾

同様の批判を『イズマラグド』旧版に対して行ったのはアドリアノヴァ・ペーレッツである。⁽¹³⁾ 彼女は『イズマラグド』旧版の典拠の一つとされている一〇七六年集成⁽¹⁴⁾の中で既に、読書の推奨が現れていることに注目した。それゆえ彼女は『イズマラグド』旧版と「異端」とを、読書の推奨という主題によって関連づけることはできないと考えた。

また彼女は、教会権力に対し十分に敬意が払われていること、聖職者がいない場合にのみ教区民が教えることを許したことを『講話』のなかに見て取った。⁽¹⁵⁾ ところが定説によれば、「異端」は全聖職者を否定しそれを民衆の教師と入れ替え、伝統的キリスト教信仰を新たな土台に基づいて再建しようとしていた。従って『イズマラグド』旧版や『講話』と「異端」とは何の関わりも持つはずがなかったのである。⁽¹⁶⁾

この主張に真っ向から反論したのがルイバコフであった。⁽¹⁶⁾ これまでの研究者は正統教会側の史料から抽出された「異端」の主張と「批判文書集」のそれとを比較していた。その結果双方のつながりは否定されたのである。だが彼によれば「異端」は痛悔や聖体を重視していたが、それを執り行う聖職者が無学であり、酒におぼれ、墮落していたために自分たちで直接、神に呼びかけたのであった。「異端」も『講話』も無学な聖職者をよく本を読む教区民と交代させようとしていた。従って双方の間には主題的共通点が存在するのである。

更にルイバコフは次のことに注目する。ペルミ主教は「異端の書物」について「書き写した書物（写本）」であるとしているのである。⁽¹⁷⁾

このことは「異端」が以前から存在した何らかの書物を自分たちの教えの規範としたこと、また「異端」自身が執筆した書物を採す必要のないことを示している。『講話』は「異端」が執筆した「書物」か否か、というこれまでの研究者の議論からの抜け道を彼が提示したことは評価されるべきである。これによって「異端の書物」に関して、『講話』の成立年代と「異端」出現の時代との比較は意味を失った。それゆえ彼は「異端」の主張と『講話』のそれとの純粋な比較検討を行い、その関連性を指摘し得たのである。

しかし以上のような議論のあり方に関して筆者は幾つかの問題点を指摘せざるを得ない。ただしその前に断っておきたいことがある。『講話』が『イズマラグド』旧版や『ウラスフィミヤ』の理念的中心であるということは間違いない。だからといって『講話』の主張と「異端」のそれとの比較で問題が解決されるわけではない。一四世紀八〇年代にブスコフで書き写され、「異端の書物」ではないかとされているのはソフィア写本の内容全体である。従って本来は写本全体が「異端教義」との比較の対象とされるべきである。しかし写本全体の公刊がなされていないので、この批判に沿ったアプローチをすることは筆者にはできない。従って本稿では問題をソフィア写本全体ではなく『講話』にとどめることとしたい。以下、問題点を指摘しよう。

第一にクリバーノフ、ルイバコフといった研究者は「異端」と『講話』の主張の比較を行っているが、これはその個々の教えではなく、教えの体系の比較によって行われる必要がある。具体的に言えば、聖体拝領、痛悔の機密に対する態度、「偽の教師」を「真の教師」と

交代させようとする主張、という個々の点だけでなく、それらの相互の連関も比較せねばならない。従って「異端教義」と『講話』双方の教えの体系をまず明らかにせねばならない。これまで『講話』の内容を検討したのはクリバーノフだけである。その際に彼は『講話』の主張の個別の点を検討したが、それら相互を関連づけることはしなかった。彼にとっては関連づけよりも、『講話』が持つ「反教會的プロテスト」を明確にすること、そしてそのプロテストが教会ヒエラルヒー全体を否定したことを論じることが最重要課題であった。第二にルイバコーフの「異端」像と定説的「異端」像との差異を考慮するならば、「異端」教義の再検討を行う必要がある、これを行って後に初めて『講話』との比較検討が可能となるのである。従って『講話』の検討と同時に「異端」教義、ひいては「異端」自体の検討も行い必要がある。ただしこの点は極めて大きな問題であり、またはじめに述べたような理由ゆえに本稿では扱わない。これについては別の機会に触れることにする。最初の点に関して言えば、『講話』の内容そのものの検討によって大部分が自ずから明らかになるであろう。

幸いにも最近出版されたクリバーノフの著作の中で『講話』が公刊され、『講話』自体の検討を行うための条件が整った。⁽¹⁸⁾ 本稿では『講話』をめぐる最近の論争に参加する第一歩としてその検討を試みることにする。本稿で行われる『講話』の検討は、「異端教義」との比較を行う前提作業としての意味を持つであろう。

註

- (1) Седелников А. Д. Следы стригольнической книжности. Труды отдела древнерусской литературы (ТОДРЛ). т. 1. Л., 1934. С. 121-136.
- (2) イスマラクトとはエメラルドの意。古代ロシアでは文書集に花や石の名前をつけることがあった。この文書集に關つてはЯковлев В. А. К литературной истории древне-русских сборников. Опыт исследования Измагарда. Одесса. 1893. が詳しい。
- (3) 彼はこの文書集を聖職者批判の目的で書かれたものであると考えたが、フエートフはこれを教区民に対する説教を目的としたものであると捉えている。
- (4) Fedotov G. opt., vol. 2. p. 130.
- (5) Седелников А. Д. Следы... С. 129.
- (5) 『講話』は一九世紀以来、文献学的研究の題材として利用されてきた。Тихонравов Н. С. Слова и поучения, направленные против языческих верований и обрядов. Летописи русской литературы и древности. т. 4. М., 1862; Срезневский И. Сведения и заметки о малозвестных и неизвестных памятниках. Сборник отделения русского языка и словесности императорской академии наук (СОРЯС.). т. 12. СПб., 1875; Никольский Н. К. Материалы для истории древнерусской духовной письменности. СОРЯС. т. 82. СПб., 1907. 參照。
- (6) Седелников А. Д. Следы... С. 133.
- (7) Попов Н. П. Памятники литературы стригольников. ИЗ. т. 7. 1940.
- (8) Fedotov G. opt., vol. 2. p. 130.
- (9) Казакова Н. А., Лурье Я. С. Антифеодальные... С. 41.
- (10) Клибанов А. И. Реформационные... С. 13-34.
- (11) Клибанов А. И. Реформационные... С. 387.
- (12) ルイバコーフは「クリバーノフが『講話』と「異端の書物」との關係を否定した理由を推測している。それによれば『講話』では正教會の機密である痛

- 悔と聖体は教区民にとって必須のものとされているにも拘わらず、「異端」は痛悔や聖体を否定していた。更に『ウラスフィミヤ』や『講話』内の他の文書は「異端」の儀式である「大地への懺悔」に全く触れていない。こうした理由もクリバーノフをして『講話』と「異端の書物」との関係否定せしめたこと、ルィバコーフは述べている。 Рыбаков Б. А. Стригольники. С. 158-160.
- (12) Адрианова-Перетц В. П. К вопросу о круге чтения древнерусского писателя. ТОДРЛ. т. 28. Л., 1974.
- (14) Кiefe 大公スヴァトスラフ「在位一〇七三—一〇七六」の時代に作成された文書集。キリスト教徒にとっての理想的な生き方を説く文書を数多く集めたもの。
- (15) Адрианова-Перетц В. П. К вопросу... С. 8-9.
- (16) Рыбаков Б. А. Стригольники. М., 1993.
- (17) РИБ. т. 6. С. 214; Казакова Н. А. и Лурье Я. С. Антифеодалные... С. 238.
- (18) Клибанов А. И. Духовная культура средневековой Руси. М., 1996. С. 301-309.

二 『講話』の概要

『講話』の内容に触れる前に、まずその概要について見てみよう。

『講話』の正確な題は『我々の聖なる父であり、コンスタンチンの町「コンスタンチノープル——筆者注」の大主教である金口ヨアン⁽¹⁾による偽の教師についての講話Слово святого отца нашего Иоанна Златоустого архиепископа Константина града о живых учителях』である。もちろん後述するように『講話』はヨアンネスが実際に書いたものではない。彼の名は、文書自体の権威づけを目的として出されているに過ぎない。現存する『講話』の写本は四つ存在している。第一にセジュエリーニコフやポボーフが扱ったトロイツェ・

セルギエフ・コレクシヨン二〇四番写本であり、一六世紀のガリーチで成立したものである。『講話』はこの写本内の『イズマラグド』旧版第七章として入っている。第二にスレズネフスキーが文献学的研究の際に使用し、一部が公刊されたキリロ・ペローゼロ・コレクシヨン四／一〇八一番写本であり、一四世紀末に成立したものである。これは俗にバイーシー文集と呼ばれている。第三に、クリバーノフがトリフォノフ集成と呼んだノヴゴロド・ソフィア・コレクシヨン一二六二番写本（ソフィア写本）がある。一四世紀末のプスコフ地方のものであり、『講話』はこの写本内の『ウラスフィミヤ』の最終章として登場する。セジュエリーニコフは写本作成年代を一三八〇年代であるとしている⁽²⁾。最後に一五世紀末のノヴゴロド・ソフィア・コレクシヨン一二八五番写本が挙げられる。これらの四つの写本の『講話』のテキストは完全に同じものではないが、それは大きな問題ではない。『講話』自体の検討とは言っても、我々の興味関心は一四世紀末の「異端の書物」とそれとの関連である。従って研究史上問題とされているソフィア写本内の『講話』のテキストを使用して、これを見ることにする⁽³⁾。なおこの写本や『ウラスフィミヤ』の起源や、それらの文献学的情報については、クリバーノフの見解が今に至るまで定説となっている。筆者はそれに頼らざるを得ない。

彼によれば、この写本自体は二卷一三〇葉から成っていて、うち一卷は羊皮紙、一卷は紙に書かれていて、一部（第三四葉裏と第六一葉裏）を除き一人の手によって書かれている。その言語は明らかにプスコフ地方のものである。写本に書かれているメモによれば、ノヴゴロ

ドのヴィドゴシチンスキー修道院の院長トリフォンがある時期にこの写本を所持していた。その中の諸文書について言えば、第六一葉から第一一〇葉までが『ウラスフィミヤ』であり、その前後には大バシレイオスや金口ヨアネスといった教父たちの名前を冠した説教が数多く挿入されている。それ以外にはベチエルスキー修道院長フェオドーシーやノヴゴロド主教ルカ・ジジャタの説教などが入っている⁽¹⁾。

『講話』はソフィア写本内の第一一〇六葉から第一一〇八葉の裏にわたっている。

『講話』と『ウラスフィミヤ』の関係をもう少し詳しく見てみよう。先に述べたように『講話』は『ウラスフィミヤ』古編纂本第六章として一二七四―一三一二年の間に作成されたとされる。この編纂本の『ウラスフィミヤ』は聖職者の墮落を批判した文書を数多く含んでいる。後にイヴァン・カリタの時代になると、この『ウラスフィミヤ』から墮落した聖職者を批判する文書が削られることとなった。これが『ウラスフィミヤ』新編纂本である。もちろん『講話』も、いや、そればかりか第六章全体が削除された。第六章はその表題だけを残して消えることとなった。ところが一四世紀末に再び聖職者の墮落に対して批判が加えられるようになると、『講話』を含んだ古編纂本の『ウラスフィミヤ』が再び書き写されるようになった。一三八〇年代にプスコフで書き写されたソフィア写本もその一つであった。

『講話』自体の起源について言えば、アルハンゲリスキーの見解が定説となっている⁽²⁾。彼によれば、文書集『金の流れЗлатоточья』に挿入されている『偽の預言者』についての『講話』が『講話』の基礎で

あった。『偽の預言者』についての『講話』の内容は異教の祭司を批判するものであったが、これを『講話』の著者は墮落した聖職者を批判する文書に改変し、簡素化したのであった。この『偽の預言者』についての『講話』を土台として、一三世紀末のウラジーミル教会会議（一二七四）の後に作られたのが『講話』であった。

本来『講話』が想定していた読者は、クリバーノフによれば、教区民であった。そればかりかソフィア写本全体が教区民に向けられたものであった⁽³⁾。『講話』やその他の聖職者に対する批判文書の多くは、彼らに対する呼びかけを伴っているのである。

註

(1) 金口ヨアンとは、四世紀のビザンツの教父ヨアネス・クリュソストモスのこと。

(2) Седельников А. Д. Следы... С. 132.

(3) 最近、トロイツェ・セルギエフ写本以外の三つの写本の関係を、『聖グレゴリウス講話』を通じて三浦清美氏が明らかにしている。ソフィア写本について言えば、これは『聖グレゴリウス講話』のノヴゴロド・ウァリアント、プスコフ・ウァリアントの成立に重要な役割を果たしたものであった。三浦清美「『聖グレゴリウス』伝承史のテキスト的研究（前編）」『スラヴ研究』四四号、一九九六年、三七―六四ページ。「同（後編）」『電気通信大学紀要』九巻二号、一九九六年、七一―八八ページ。

(4) Кибанов А. И. Реформационные... С. 13-14, 28.

(5) Архангельский А. С. Творения отцов церкви в древнерусской письменности. Казань, 1890. この著作を筆者は参照できなかった。従ってその内容については、フェドートフ、クリバーノフの研究によった。

Fedotov G. op. cit., vol. 2. pp. 130-132. Кибанов А. И. Реформационные... С. 113-114.

(6) Кибанов А. И. Реформационные... С. 31.

三 『講話』の検討

では『講話』の内容を検討しよう。その著者の第一の主張は、書物とそれを読むことの重要性である。著者は述べている。「主は言われた。『私を愛する者は昼夜にわたって私の法、つまり書物を学ぶのである。』」（一〇六「以下ソフィア写本のページを示す」）。『書物の中には、子の宝と父の賢さがある』（一〇七）。「兄弟よ、主キリスト、我々の神が、どのようにに悪しき者を暴き、良き者を守り、憐れみ、あらゆる糧によって肉体を救い、書物の教えによって魂を養ったのを見ましたか」（一〇八）。

ではなぜ書物を学ぶのか。それは著者によれば、書物が聖霊によって創られたからである。⁽¹⁾ 書物は「聖霊の教え」（一〇八）であった。それを学ぶことで人々は「来るべき時代の恐ろしい本のことを忘れない」（一〇六）のである。「恐ろしい本」とは、著者によれば、最後の審判の際に開かれる本である。従って書物を読んだ者は清廉な生活を意識し、そのことで「救済の道、永遠の命への道を見つける」（一〇七）のであった。以下述べていくように、こうした書物に対する尊敬と読書の勧めが土台となって、『講話』の様々な主張が派生しているのである。

ところで『講話』における書物とは「預言者、使徒、聖人の著作」（一〇八）であった。クリバーノフはなぜか書物を「聖書」のことでありと限定しているが、『講話』のなかで上記のように明確にされていることを考慮すれば、そうした意見は認められない。⁽²⁾ 『講話』の著

者は具体的に言う。「まさにこの道『救済の道——筆者注』は、教父の教えや清き懺悔の緒言から始まっている」（二〇七）。教父の教え、つまり教父の名を冠した著作は『ヴラスフィミヤ』や、ソフィア写本のなかに数多く含まれている。『清き懺悔の緒言』は先に述べたように『ヴラスフィミヤ』古編集本第六二章の第三の文書、つまり『講話』の直後に配置されている文書であった。モンゴル襲来以前の時代に反異教文学として成立した『清き懺悔の緒言』は、社会の悪としての「富の——筆者注」不正な収集」を批判し、また「永遠の命」について多くを語っていた。従ってクリバーノフの述べているように『講話』と『ヴラスフィミヤ』内の諸文書との間には密接なつながりが存在していたこと、「『講話』の著者は、自分のことをこの著作『清き懺悔の緒言——筆者注』の遺訓の継承者、またこの著作の理念の継承者と考えていた」ことには同意できる。⁽³⁾ 一方で『講話』の著者は「聖なる書物の中に存在しないあらゆるものは神の敵である」（二〇七裏）と述べている。

しかし書物を単に読めばよいと言うわけではない。著者は「万人の前で」「声をあげて」（二〇六）読むことを説いている。この主張は更にイザヤらの預言者、そして最後にはキリスト自身の言葉で根拠づけられている。例えばイザヤは「力を込めて叫びなさい。声を惜しんではならない。説教をしなさい。そして教えなさい。ラッパがその音を大きくするように」（二〇六）と述べた。⁽⁴⁾ ルイバコフはこの主張がまさに「異端」のそれと一致しているとした。なぜならペルミ主教は、「異端」が町の街路や広場において「書物の言葉を人の前に明ら

かにした」ことを批判しているからである。⁽⁵⁾ クリバーノフが正しく述べたように、『講話』の著者は、教会だけが正しい教えを所持していることを否定し「あらゆる場所にキリストがいる」(一〇六)ことを強調する。⁽⁶⁾ この点にだけ関して言うならば、ルイバコーフの推論は妥当であるように思える。

では誰が説教を行ひ得たのか。つまり説教を行う権利を誰が持っていたのか。セジェーリニコフによれば、それはあらゆる人であった。⁽⁷⁾ クリバーノフはセジェーリニコフと同様に考えたが、更に一步それを押し進めた。彼によれば、著者は「民主的原理」に基づいて万人に説教の権利が付与されるべきと考えていた。⁽⁸⁾ だが『講話』の著者の考えは、クリバーノフの意見とはいささか違っている。著者は一つの説話を持ち出している。教える権利を持たなかったエルダデとメダデが宿営で人々に神の言葉を述べ伝えていた。彼らのことをヌンの子ヨシュアがモーセに知らせた。モーセは答えた。「霊は、全ての人が預言することを認めるだろう。そうした時、彼ら二人にも霊が与えられるのである」(一〇六—一〇六裏)と。⁽⁹⁾ 一見セジェーリニコフの意見は正しいように見える。だがここで重要なのは「霊」が念頭に置かれていることである。教える権利を望む人々に「霊」がくだるとするモーセの言葉は特徴的である。単に誰もが教えても良いのではなく、「霊」を持つことではじめて教える権利が認められるのである。この説話を含む民数記のなかでも万人が教えることは認められておらず、神が「霊」を与えた者だけが預言を許されているのである。『講話』の著者は、何人も潜在的には教える権利を持つことを認めつつも、「霊」

を授かった者のみが実際に教える権利を持つと考えていた。その他の点は問題となっていない。教会人であってもなくても、「霊」を授かること、つまり「真の聖職者」となることではじめて教える権利を得ることが出来たのであった。

さて「真の聖職者」の理想型について記した後、著者は教区聖職者の現状に言及する。彼は「多くの司牧者は、家畜の番をするために、召使いを雇う。そして彼ら自身は酒を飲み寝ているのである」(一〇六裏)と述べる。大多数の聖職者は「富んだ財産で満たされ、「人々を——筆者注」惑わしている」(二〇七)。現世における救済者たる聖職者は怠惰に耽り、「既に自分で教えることはなく、彼ら「教区民——筆者注」に命じることもない」(二〇七)のであった。だが最も非難されるべきは書物を読まないことであつた。「終末の日には書物の誹謗者がいる。彼らは自らの欲望に従って進むであろう。彼らは多くの人々を破滅に導く偽の教師である。多くの人々は、無益で歪曲した彼らの脆弱な教えに従うであろう」(二〇七裏)とペテロが述べたことを著者は強調する。⁽¹⁰⁾ 更に強い調子で次のようにも述べられている。「よく学ばず、書物によって英知を確実なものとしていない盲目の教師よ、あなたたちに災いあれ。あなたたちは書物ではなく祭服を好み、神の言葉を捨て、食欲に仕えていて、その神は食欲である」(二〇七裏)。ここでも、聖職者の墮落を述べる際には「神の言葉」たる書物との関係がまず念頭におかれているのである。彼らの墮落は「書物の軽視によることは明らか」(二〇七)であつた。

こうした「偽の教師」により司牧される教区民は、もちろん危機的

状態に陥ったことだろう。ルイバコーフが指摘するように、彼らは「偽の教師」を介した神との繋がりに疑問を感じていた。⁽¹¹⁾「偽の教師」は読書をせず、その教えは「単純な教え」（一〇六裏）であり、その教えを聞く者は「天に入ることができない」のである。「彼らは人々が入らないように天国を閉じ、また自分たちが入らないだけでなく入ることを望む人々にも入らせない」（一〇六裏）のであった。

書物を理解しないこの「偽の教師」に対し、著者の態度は厳しい。「聖職者の階位を持っけていても、この道に沿って進まないのなら」「彼から聖性は奪われる。そして教えや清き懺悔の緒言を、聞くだけでなく行動によっても受け入れるような者に聖性が与えられる」（一〇七―一〇七裏）。一方で書物を受け入れる者に聖性つまり「霊」が与えられること、他方書物を読まず「霊」を持たない者からは教える権利は剝奪されること、が主張されているのである。

この「偽の教師」にどのように対応すべきであるのか。「もし町に軍隊が向かってきたなら、『町へ逃げなさい。人々よ、敵があなた方に迫っています』と叫びなさい。これを聞いた知識ある人々は、危機を回避するために町に入るでしょう」（一〇六裏―一〇七）。この「軍隊」、つまり「危機」の具体的内容は、「悪を教えるような聖職者・教師を連れてくる」（一〇七）ことであった。つまり著者は今日「偽の教師」が増えていて、危機的状況であるという認識の下、彼らに騙されることなく、真の救済の道を得られるよう「書物」を読むことを勧めているのである。「偽の教師」に対する防御手段としても読書は有効であった。

だが書物を自分で読むことはできても、日常の教会での説教には、どう対応すべきであったのか。著者は言う。「使徒パウロは言っている。『教示する外の人々が聖職者に相応しい』と。もちろん教示とは教えであり、外の人々とは司祭、輔祭ではなく、歌い手や読み手であるような人々」（一〇六裏）であった。つまり階位を持たずに教会に勤務する聖歌隊のメンバーや、聖務の際に声を出して聖書を読む人々から説教を聞けよということであった。セジェリーニコフはこの箇所を根拠として、著者が「教会構造が持つカースト的性格に敵意を持っていた」ことを主張した。⁽¹²⁾またポポーフは「これはまさに全てのピラミッド構造の土台の転覆」の主張であるとした。⁽¹³⁾この点にはクリバーノフも同意していて、「偽の教師の講話は聖職者批判を、聖職者ヒエラルヒー組織の否定にまで導いている。講話はこの組織を民衆の教師に開放している」と述べている。⁽¹⁴⁾彼によれば、『講話』は民主的階層の利益を代表しているのである。⁽¹⁵⁾だが上記の主張は、文脈上、明らかに「偽の教師」への対応策として述べられていることである。もちろん「読み手や歌い手」も教えることはできたが、「真の聖職者」が存在するのであれば、彼らの出番はなかった。彼らが必要とされるのは、アドリアノヴァ・ペーレッツも指摘するように、「司牧者が狼となつたとき」（一〇六裏）や「主教や教師がいなるとき」（一〇六裏）だけであった。こうした限定句の存在により、セジェリーニコフやポポーフの言うような教会構造全体の否定は認められない。著者の主張はあくまで「偽の教師」が出現した場合に交代を認めるという主張である。この主張はセジェリーニコフらの意見とは相容れないのである。

クリバーノフも含めたこれらの研究者たちは、ソヴェト史学に顕著な傾向、つまり『講話』の「反封建的性格」を強調するあまり、望む者が誰でも「良き教師」となることができると著者が考えた、と主張するに至ったのである。しかし著者の主張は、全教会ヒエラルヒーに対する民衆の戦いではなく、『講話』の題目にもあるように、墮落し、清廉生活を送らず、それゆえ人々を救済に導かないような「偽の教師」に対する戦いなのである。教会ヒエラルヒーそのものの否定を著者が主張する箇所は存在しない。ポポーフだけは上記の箇所をストリゴリニキと直結させた⁽¹⁶⁾。なぜなら「異端」は墮落した聖職者をよく本を読む勤勉な教区民と交代させた⁽¹⁷⁾とされていたからである。しかしアドリアノヴァ・ペーレッツによれば、一四世紀のノヴゴロドの農村・辺境地域では、教区民が教える場合があった⁽¹⁸⁾。それゆえこのことを根拠として、『講話』がストリゴリニキの「教典」であるとは言えないのである。

これまで述べてきた全ての主張は、著者によれば「聞くだけでなく行動によっても」実行される必要があった。最初に述べたように読書は大きな声で、あらゆる場所で行うべきものであった。それ以外でも『講話』の最後の部分で「私たち子どもは、あなたの意志によって創られた説教を受け入れ、耳で聞くだけでなく、あなたの意志をなし、我々の主たるイエス・キリストの永遠の命を得るのである」(一〇八裏)とされている。つまり「偽の教師」の「偽の」説教を回避するだけでなく、「良き」説教の内容を実行する教区民というものが理想とされているのである。当然「良き」説教たる書物は、先に述べたよう

に「神の法」であるので、「良き」説教の内容の実行は神の意志の実行と直結している。キリストは述べている。「その日には私に多くの人々が『主よ、主よ、我々はあなたの名前で洗礼を受け、あなたの名前で多くの奇跡をなしているではありませんか』と言った」(一一〇八)。主なるキリストは彼らに回答した。「私の名で洗礼を受け、多くの奇跡をなしても、私の意志をなさないのなら、私から離れなさい。あなたたちのことを私は知らない」(一一〇八)と⁽¹⁹⁾。すなわち「神の意志をなさず主の戒めに従わないようなキリスト教徒」(一一〇八)への批判として書かれた『講話』では、神の意志の実現を目指し、行動を起こすことが強調されているのであった。

この主張は『講話』の後半部において、一層強くなる。「あなた方は、あらゆる霊を信じてよいというわけではない。また悪い説教を聞いてはならない。どれが悪い教えであるか、どれが良き教えであるか理解しなくてはならない」(一〇七裏)。「良き教え」の選択の際には、それを話す人物は問題とされない。つまり「もし普通の人から聞くとしても良き教えなら受け入れなさい。もし司祭が関わっているとしても悪い教えなら聞いてはならない。同様に聖書が『もし天使がやってきてあなた達に教え、我々が教えるのと違った方法で始めたのなら、呪詛される』と述べているのを理解しなさい」(一〇七裏)。こうした「悪い教え」を説く人々は、先に述べたように「永遠の命」や「天国の入口を閉ざす」人々であるから、「そうした人々と飲んではならないし、食べてもいけない」(一一〇八)のであった。同じ主張が幾度も繰り返される。「そうした人々と親しくなり、食べ、酒を飲む者は、

神とキリストと聖霊の敵である、悪魔である……キリストと共にある私のかわいい兄弟や子どもたちよ、もしあなたがたが知識を持っているのなら偽の教師の言うことを聞いてはならないし、そうした人々と交わってはならないし、食べても飲んでもしけない」（一〇八）。「もし兄弟たるあなたが不従順であり、真面目な教えを聞かないなら……永遠の命を受け継ぐことはできないであろう」（一一〇八）。このように『講話』の最後では書物を理解することの要求、救済に導かない「偽の教師」の「偽の」説教を聞くことの禁止が説かれているのである。

著者は強い口調で繰り返す。「子どもたちよ、あなたがたは、偽の教師や『罪を犯しても、罪を犯していなくともキリスト教徒には苦難はない』と述べる者を監視しなさい。そうした人々の中で生き続けているような、悪と、悪魔の誘惑は、破滅に至る。そのように話す人々は呪われる。彼らには、この世においても、来世においても与えられるものはないだろう。もしそのように話す者が、人々の前で懺悔をしないように言ったことを否認するのなら、その者は生まれない方がよかった」（一一〇八）。

『講話』の内容をここですとめてみよう。第一にその土台として一貫しているのは、「神の法」、「神の意志」である書物への敬意である。従ってキリスト教徒は、教区民であっても聖職者であっても、書物を読むことが当然の課題であった。そればかりか『講話』では、書物を単に読むだけでなく、内容を理解し、実行することが必要とされている。このことを行わない場合、「永遠の命」を得ることはできなかった。

ところが現実には書物を読まない「偽の教師」が存在していた。教区民を天国へ導くはずの聖職者が「神の法」、「神の意志」を知らないということは、そこから教えを受ける教区民にとって看過できない問題であった。そればかりか彼らは大食、飲酒に耽っていて、金銭を集めることに夢中になっていた。そこで第二の主張が現れる。つまり彼らの「偽の」説教を聞くこと、更に彼らと交わることの禁止である。当然ここで、そうした聖職者への痛悔や、彼らから聖体を受けることも禁じられると考えるべきであろう。

こうした事態に遭遇した場合、教区民は「偽の教師」に取って代わることが認められている。なぜなら教区民は聖書や教父の著作、『清き懺悔の緒言』といった「書物」を読み、「霊」を得て「教える権利」を持っていたからである。もちろん『講話』の著者は、教会ヒエラルヒーに属するという理由だけで、聖職者の権威を否定してはいない。つまり十分に「書物」を読んでいる教会の聖職者の権威は認められているのである。したがってこの主張は「偽の」聖職者に司牧される教区民にのみ浸透し得たものであろう。

むすびにかえて

これまで『講話』の個々の主張とそれらの繋がりについて述べてきた。これにより「異端」の主張との比較検討の第一段階が終了した。現段階で見る限り、クリバーノフも指摘するように「異端」の教義と『講話』の内容を結ぶ直接の根拠は存在しない。先行研究では「異端」は教会の聖職者ヒエラルヒー全体を否定したとされている。だが『講

『話』は十分に教会聖職者の「聖職者」性に敬意を払っていた。また「異端」の最初の主張は信仰生活の実践上における聖職者に対する不信、とりわけ叙階の際の金銭支払い（シモニア）に基づくとされている。だが『講話』の基本的な主題は救済のために書物を理解することであった。更に『講話』のなかでは上に見た主張の連関が存在した。書物を読み、その内容を理解し、実行することである。この段階ではじめて「偽の教師」たる墮落した聖職者への批判が登場したのである。このことは、最初から聖職者を批判していた「異端」の主張とは明らかに異なっている。もちろんこうした比較は、最初に述べたように「異端」の主張の再検討の後に可能となる。それゆえこれは別の機会に詳細に述べられる。

註

- (1) Клибанов А. И. Реформационные... С. 113.
- (2) Клибанов А. И. Реформационные... С. 113.
- (3) Клибанов А. И. Реформационные... С. 24.
- (4) 本書第四〇章第九節。
- (5) Казакова Н. А. и Лурье Я. С. Антифеодальные... С. 240
- (6) Клибанов А. И. Реформационные... С. 114.
- (7) Седелников А. Д. Следы... С. 134.
- (8) Клибанов А. И. Реформационные... С. 114.
- (9) 民数記一一章第二六—二七節。
- (10) ベテロの第二書簡、第二章第一節。
- (11) Рыбаков Б. А. Стригольники. С. 92.
- (12) Седелников А. Д. Следы... С. 133.
- (13) Попов Н. П. Памятники... С. 39.

- (14) Клибанов А. И. Реформационные... С. 24.
- (15) Клибанов А. И. Реформационные... С. 116.
- (16) Попов Н. П. Памятники... С. 39.
- (17) РИБ. т. 6. С. 215, 228; Казакова Н. А. и Лурье Я. С. Антифеодальные... С. 238, 243.
- (18) Адрианова-Перетц В. П. К вопросу... С. 9.
- (19) Матайによる福音書、第七章第二二—二三節。
- (20)ガラテア人への書簡、第一章第八節。